

應用して山とか木の書き方を教へるといふ風にします。子供は非常に喜びます、そして山といふものは木といふものはかうしてあらはすものと大體の發表の仕方を會得してゆきます。寫生に興味をもつのは小學校以上の兒童であります。

こゝでは園外保育といふ事につとめて居ります。規定してやるのは一週に一度ですが、出来るなら三度位やりたい考へであります。私はいつも園外保育をやかましく主張して居ります、直觀を擴充してゆく爲めに幼児教育には非常に大事な事でありますから。

玩具はこゝには大體フレーベルの恩物を用ひて

「エミール」の幼児教育の感懷 (三)

文學士 福島 政雄

三、自由の園

自然の兒は自由であるべき筈であるのに、きび

ちない人の世はすべての人の子を捕へて小さくせ

居ります。モンテッソリーの恩物も女子高等師範から送られたので併せて用ひて居ります。その外普通玩具の價値のあるものなるべく多く用ゐるつもりで居ります。種類から云へば普通玩具を多くして、自由遊びにはそれを用ひさせることにして居ります。

一體幼稚園は監督して遊ばせるといふ事を主とするものでありますからその方面に力を盡したと思つて居ります。普通玩具が少くて、遊ぶ材料に困るといふやうなのは幼稚園としては非常な缺點と思つて居ります。(文責在記者)

まき檻の中に入れやうと試みる。入るゝものゝ誤りか入れらるゝもの過ちか。人の性は檻に入れられて永遠に矯められねばならぬほどに悪であらうか。自然のまゝに自由の境にはなれたる時、幼な兒は自由の味をあらぬ毒酒の味と味ふのであらうか。心は永遠の拘束を受けねば永遠の放埒の道を辿るのであらうか。あゝ荒れ狂ふ野の中にやられて止めどもなく駆け行くのが自然の人の心であらうか。春の野の緑の草に樂しげに遊ぶ小羊の平和の自由は人の子の心に味はれぬものであらうか。昔から幾世代の人が幾世代の思考に思考を重ねて人々の意見は自ら二つに分れ、一は人の性を善なりとして其の自由の發展を叫び、一は人の性を悪なりとして其の外部的拘束をはかり。何れか是何れか否、何れか真何れか偽であらうか。今はこれに就いてのルーソーの考を少しく探つて見たいと思ふ。

ルーソーは子供の自由といふことについて如何

に考へたであらうか。次に述べる所は其の言葉の大略である。

我々人間は奴隸的の偏見に囚はれて居る。我々は習慣上強制をしたり制御をしたり又は拘束をしたりばかりして居る。人間は皆生れて奴隸となり死んでも奴隸の境を離れることが出来ぬ。人間といふものは生れると直に襁褓の中にぐるぐると巻かれる。死ぬれば棺に入れて釘づけにせられる。そして此の世に生きて居る間は我々の制度の拘束を受ける。我々は子供が生れると先づ頭の形を色々に捏ねあげて拵へてそれからその中に我々の哲學者の思想などを注ぎ込んでそして一定の形にてはめやうとする。

子供が母の胎内より出づるや否や子供はその手足の自由を味はうとするけれどもそれはなか／＼に許されない。手足を自由に延ばしたり動かしたりすることは許されないうで拘束せられる。子供は長い着物を着せられ、頭を動かすことも容易では

ないし手は身軀にびつたりとせられてなかく、自由
由に動かすことが出来ない。リンネルにつままれ
る。その外種々様々のものにつつままれる。其
のために子供は少しも其の身軀の位置を變へるこ
とが出来ない。此の如くにして子供が息を止めら
れないならば實に幸福と言はねばならぬ。

初生兒は其の手足を伸ばして動かす必要がある
のである。そして胎内に居たときの窮屈な有様の
取かへしをせねばならぬのである。然るにその運
動を妨げるとは何事ぞ。恰も子供が生きて居るし
るしに動くのを恐れるやうにするのは何事である
か。此の如くにして子供の生長を助ける運動は非
常なる障害を受ける。子供は非常に努力して此の
障害を除かうとするけれども努力すれば努力する
ほど彼の力が消耗するばかりである。故に子供は
母の胎内に居る時に不自由な目にあつて居るのと
同じく生れ出でしも不自由な目にあふばかりであ
る。子供が出生によつて得る自由の幸福などは殆

んど何にもないのである。

人間が子供の手足を動かないやうにして束縛し
て得る結果はたゞ一つである。即ち血液の循環を
悪くして子供の力の増加や生長を止め従つて健康
を害するといふことになるばかりである。故に斯
様な束縛の行はれない所では人間が一般に大きく
姿も宜しい。子供を束縛する習慣の地方では様々
の不具者や姿の悪い者が非常に多いのである。人
は子供が自由に運動して不慮の怪我でもして不具
になることを恐れて束縛するのであるけれども實
は束縛した爲に子供の不具になるものがよほど多
いのである。

此のやうに子供に束縛をあたへることは常に子
供の身軀に影響を及すことには止らないのである
かゝる恐るべき壓迫は子供の心情や氣質に必ず大
なる影響を及さずには止まぬものである。子供が
最初は感ずる感覺は苦痛に満ちた感覺である。實
に子供は手がせ足がせを入れられた罪人よりもな

は不幸である。甲斐なき努力をつゞくるうちにやがて子供は次第々々に悪くなつて来て泣き叫ぶことが多くなつて来る。諸君は子供は涙を以て此の世の光を見るなど、言ふけれども余の信する所によれば諸君は初から子供の自然の發達に反對するやうなことをして居るのである。諸君は搖籃の子供に與へる第一の送りものとして拘束といふことを與へて居るのではないか。諸君は子供の爲に注意をして世話をして居るなど、考へて居るのであらうけれども實は苦痛を準備して居るのでないか。而して子供はその自由にすることを許されるものはたゞ其の聲ばかりであるから其の聲をあげて其の苦痛を訴へるのは實に尤もの次第ではあるまいか。子供の訴ふるが如き泣聲は諸君が子供にあたふる苦痛を物語るものに過ぎないではないか。若しも諸君が子供と同じやうに束縛せられるならば諸君は必ずや子供の幾層倍の大聲を張りあげて泣き叫ぶに相違ない。

此のやうな道理に合はない習慣は何から起つたものであらうか。それは母親がその自然の務を怠つて哺乳のことを乳母などに打まかせてしまつたことから起つたのである。乳母などはどうしても出来るだけ手のはぶけるやうにして子供を取り扱はうとするものである。そのために子供の自由といふやうなことは全然考へないでたゞ自分の便利な方法ばかりを考へて子供を束縛して置かうとするものである。子供が不自然になるのは寧ろ當然のことではあるまいか。若し自然のまゝの自由の境に置かれて育てられた子供ならば部屋の隅の所にねかして置いても決して泣いて人を困らせるといふやうなことはないのである。

故に世の母たる人々よ。眞に母親たるの價値ある母親は喜んでその子供を自分の手で育て、喜んで子供のために都市の生活をすて、田舎に於いて其の教育の爲に身を捧げるのである。束縛せられた子供はその顔色が暗赤色を呈して居る。斯様な

子供が若しも泣きもせずにおとなしくして居るならばそれは泣く力さへも失つてしまつたのである。何といふ痛ましいことであらうか。

人或は言ふものがあらう。自由のまゝにするこゝとを許された子供は自分自身に害になるやうな所に行つて彼自身の力やその手足し美しい形を損ふやうなことを爲すではあるまいかと。併しこれは實に杞憂であつて未だ嘗て實際に證明せられたことではないことである。自由に子供を育てる人々の間に於いては子供が自分に怪我をして不具になるやうなことは殆んど一つも無いのである。子供はまだ優しく柔かである。故に非常な危険なことをするといふ氣づかひは殆んど無用である。若しも子供が一寸でも不自然なことをしやうとすれば非常に苦痛を感じ其のためにその情態をまげられずに再び正しきを自然にするやうになるものである。

右はルーソーの述べて居ることの大意であるが我々はこれによつて何事を悟ることが出来るので

あらうか。我々はこれによつて子供の自由といふことが極めて大切であるといふことを感ぜざるを得ないのであらう。自然は子供に柔かなる手足をあたへ未だ決して強き力を與へない。子供はその與へられた力を自由に自然のまゝに無理をせずにつかつたならば決して身を害するやうな結果になるとはないのである。然るに我々が子供を育てるにあつては往々にして此の自然の妙用を無視して妄りた人意を加へ、子供の手足を窮屈にして自由に動かないやうにし、そしてそれが即ち子供を大切に取扱ふ所以であると考へて居る。併しなから自然の力といふものはそれほどまでに拘束をせねばならぬほどに悪いものであらうか。我々は自然を壓迫することによつて子供の生ひ立ちに善の開展を望むことが出来るであらう。此處には大なる疑なきを得ないのである。而してルーソーの言は蓋し背筋を得て居るものと信するのである。

靜に思をめぐらして子供の生活を觀察して見る

がよい。我々幾十年の人生の行路を歩して自然ならぬ人爲の偽を以て恰も自然のやうに感ずるほどに神経のすさんだものから考へたならば我々の心のすゝままに行ふといふとは大なる福の本であつて我々は出來得るかぎり物の正しき道理を考へそれに従つて行はねばならぬといふことも尤もなことであるのであるが、生れたまゝの子供の心が果して我々の汚れた心に比べられるやうなものであらうか。汚れた心にこそ身を損ふやうな不自然の心も起るのであるけれども、未だ塵の世の塵にしまぬ子供心に果して我々のやうな不自然の要求が動くであらうか。人間は可愛らしい子供として生長する其しじめから汚れに汚れた心を持つて居るのであらうか。どうしてそんなことがあらうか。人の世は塵に汚れても人の世の旅の首途の子供の心は純潔である無垢である。純潔無垢の心が動いて自然に出でた欲求に何の誤れることがあらうか。故に子供の心の自然に出づる子供の行は決

して妄りに壓迫すべきものではないのである。

此に於いてか自由は子供の爲にゆるされねばならぬ。無心の子供が自然の心と解けて無心の裡に行動するときそれは決して束縛せらるべきものではなくて寧ろ自然のまゝにそれを發展させねばならぬものである。子供は自由の園に育てられねばならぬのである。

愛らしい瓜々の聲をあげてはじめて此の世の光を浴びた子供が今まで窮屈であつた母親の胎内とは全然ちがつた廣い世界にその小さき手と小さき足とを自由にのばして自由に動かうとするのはたらきこそは子供の心の自然に發達する第一歩ではあるまいか。それを無理にも拘束しやうとする大人の心は何といふ無情な心であらうか。子供を愛するとは名ばかりであつて子供を苦るもの實にこれより甚しきはないのである。ルーソーはよくこそ此の間の消息を痛切に述べて居るのである。併しながら子供の自由を尊ぶと云つても單に放

任して何等かへりみることにないといふことを意味するのではない。自由の花園には優しき花守が常にその花園の生ひ立ちに氣をつけて暖かい日の光にあたるやうに潤の雨のそゞやうにと心をつけて居ることを我々は忘れてはならぬ。又の優しき花守こそは慈愛の化身たる母親である。自然の花が自然のまゝに美しく咲き綻びるためには日の光と雨の潤とがなければならぬ。自由の花園に咲き出づる愛らしき撫し子の花は母の慈愛の光と潤との心につゝまれて生ひ立たねばならぬ。それではなくてどうして自由の發達といふことが出來やうか。自由にならうとする力は自由にしやうとする慈愛にあはずに眞に自由になるものでは決して無いのである。母親が慈愛の心から子供の心を視る時に母親の心に自然に湧き出づる尊き情は、決して子供を不健康にしやうとする心でもなく又子供のために束縛しやうとする思でもない。實に純なる母親の心はたゞ一すびに子供のためを思ふばか

りである。其の心の中につゝまれてはぐゞまるゝ子供の心が何の無理もなく自然に美しく生ひ立ちゆくところに眞の自由の園があるのである。即ち眞の自由の園に包容せられた精神の花園である。そこには何等の束縛の事實もなく何等ごぢない意識もなく母の心は慈悲に燃えその心は自然の樂の境に融けて母と子との心は一つになり、止むに止まれぬ情が其の間に動いて健康發育、至心は自らそこに湧き出るのである。あゝ何といふ美しさであらうか。これこそは精神的にゆかしさにたへぬ教育の花園としての家庭ではあるまいが。人の性は束縛すべき惡ではなくて融和すべき善であるといふやうなことも此に至つてはじめて言ひ得ることではなからうか。あゝ優しき母の手にいだかれて愛らしき手足を心のまゝに働かすことの出來る子供の前途には如何ばかり樂しき希望が充ちて居るであらう。その希望のかけやく所こそは尊き自由の園であるのである。